

# インターネット依存尺度（IAT）の検討： 大学生を対象として

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩, 井上, 真理子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4871">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4871</a>

# インターネット依存尺度 (IAT) の検討 —大学生を対象として—

学芸学部 心理学科 川上 正浩  
富山大学大学院 井上 真理子

**要旨：**川上 (2022) は Young (1998) のインターネット依存尺度 (Internet Addiction Test : IAT) を日本の女子高校生 49 名を対象として実施し、因子分析を実施した。その結果、“囚われ”、“過剰使用”、“本業怠慢”、“気晴らし”、“ネット優先”の 5 因子が抽出された。本研究では、大学生 196 名を対象に Young (1998) のインターネット依存尺度 (Internet Addiction Test : IAT) を実施し、大学生データを対象に改めて因子分析を実施した。その結果、“囚われ”、“本業劣後”、“依りどころ”、“過剰使用”、“ネット優先”の 5 つの因子が抽出された。高校生データに基づく因子分析 (川上, 2022) とはやや異なる結果であったが、同時に測定された個人特性とこれら 5 つの下位尺度得点との相関を検討したところ、本業劣後は改良型セルフ・コントロールや学習意欲と関連していること、囚われ、本業劣後、依りどころ、過剰使用が、外的要因による行動のコントロールと関連していること、また、他者の遅れに対する非難と依りどころとが関連していることなどが示された。

**キーワード：**インターネット依存、大学生、Internet Addiction Test

## 問題と目的

スマートフォンの所持率は年々増加し、2019 年の調査で既に、15 歳から 24 歳の所持率が男女ともにほぼ 100% であることが報告されている (モバイル社会研究所, 2019)。スマートフォンの普及に伴い、スマートフォンの長時間の使用による身体的不調、睡眠時間の減少 (総務省, 2013)、さらには「スマホ依存」「インターネット依存」と言われるような、専門的治療 (中山, 2015) が必要になるケースも増加している (池村, 2014)。

令和 2 年度における内閣府のインターネット利用環境実態調査 (内閣府, 2021) では、高校生のインターネット利用率は、男子で 98.5%、女子で 99.3% であり、全体の 98.9% がインターネットを利用していることが示されている。

Griffiths (2005) は、インターネット使用には、耐性 (tolerance)、重要視 (salience)、気分の変化 (mood modification)、引きこもり (withdrawal)、葛藤 (conflict)、再発 (relapse) といった、薬物依存に近い次元 (dimension) が含まれていることを指摘し、インターネット依存は、薬物依存に近い特徴を示すことを強調している。1998 年の時点でこのことを指摘した Young (1998) は、こうしたインターネット依存の程度を測定するため

の 20 項目からなる Internet Addiction Test (IAT) を提案した。IAT では、それぞれの項目に対し、たとえば、「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうこと (Do you feel depressed, moody, or nervous when you are off-line, which goes away once you are back on-line?)」「全くない (1)」から「いつもある (5)」の 5 件法で回答を求めることにより、20 項目の合計点によって回答者のインターネット依存の程度を判定する。たとえば、この合計点が 70 点以上であれば、生活に重大な影響をもたらす高いインターネット依存であると判定される。このように Young (1998) の IAT は、心理学的には、1 因子の尺度として扱われてきたが、以降の研究においては、多因子構造を指摘する研究もある (川原, 2021 など)。

たとえば Widyanto & McMurrin (2004) は、囚われ (Salience)、過剰使用 (Excessive use)、本業怠慢 (Neglect work)、心待ち (Anticipation)、統制欠如 (Lack of Control)、社会生活の無視 (Neglect Social Life) からなる 6 因子構造を提案している。また、レバノンの大学生 256 名を対象とした Samaha, Fawaz, Yahfoufi, Gebbawi Abdallah, Baydoun, Ghaddar, & Eid (2018) は、統制欠如 (Lack of Control)、社会的な引きこもり

と情緒的葛藤 (Social Withdrawal and Emotional Conflict)、時間管理の問題 (Time Management Problems)、問題行動の隠蔽 (Concealing Problematic Behavior) の4因子を抽出した。Widyanto, Griffiths, & Brunnden (2011) は、心理的/情緒的葛藤 (Psychological / Emotional Conflict)、時間管理の問題 (Time-Management Problems)、気分変化 (Mood Modification) の3因子を抽出し、アメリカの大学生 215 名を対象にオンライン調査を実施した Jelenchick, Becker, & Moreno (2012) は、依存的使用 (Dependent Use) と過剰使用 (Excessive Use) の2因子を抽出した。

また、日本人大学生を対象として研究を行った Osada (2013) が、社会的相互作用の問題 (Social Interaction Problems)、仮想現実 (Virtual Reality)、強迫性と衝動性 (Obsession and Impulsion) の3因子解を報告している一方で、同じく日本人大学生を対象にデータを収集し、因子分析を行なった川原 (2021) は、「コントロール喪失」と「執着と恥・苛立ち」の2因子構造を提案している。

このように、IAT に関しては複数の因子分析結果が報告されているが、岡安 (2016) によれば、その因子構造は、文化的背景や対象者の属性によって異なっているとされている。しかし、これらの先行研究で示された因子構造の中心には、囚われの感覚や、時間管理等のコントロールが失われていること、本業や社会的な行動に差し障りが生じていることなどがあり、共通する部分も多い。

川上 (2022) は、高校生、特に、内閣府 (2021) の調査においても、男子に比べて、よりインターネットの使用率の高い女子高校生に焦点を当て、Young (1998) の IAT を実施し、改めて因子分析を行うことで、その因子構造を検討することを目的に調査を実施した。川上 (2022) の調査では、IAT が日本の女子高校生 49 名を対象として実施された。最小二乗法、Promax 回転による因子分析の結果、“囚われ”、“過剰使用”、“本業怠慢”、“気晴らし”、“ネット優先”の5つの因子 (12項目) が抽出された。“囚われ”は「インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが」、「次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが」の2項目からなり、インターネットをしていない場面でインターネットに思いを馳せる傾向である。“過剰使用”は、「インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが」、「インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが」、「気がつ

くと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」の3項目からなり、インターネットをしている場面で過剰な時間、使用してしまう傾向である。“本業怠慢”は、「インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが」、「インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが」、「インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが」の3項目からなり、インターネットをしていることで、本業に支障が出る傾向である。“気晴らし”は、「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」、「日々の生活の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることが」の2項目からなり、インターネットをすることで気晴らし (distraction) の効果が得られる傾向である。“ネット優先”は、「誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが」、「配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが」の2項目からなり、インターネットを、対面での対人関係よりも優先する傾向である。

川上 (2022) においては、同時に測定された個人特性とこれら5つの下位尺度得点との相関が検討され、セルフ・コントロール、学習意欲が本業怠慢と関連していることが示された。さらに、外的要因による行動のコントロールと囚われ、気晴らしとの間にも関連が示された。

高校生向けのインターネット依存尺度として構成された、鶴田・山本・野嶋 (2014) の「高校生向けインターネット依存傾向測定尺度」は、「精神的依存状態」「メール不安」「長時間利用」「ながら利用」「対面コミュニケーション不安」の5因子 39項目からなっている。この尺度の総合得点は、Young の尺度との間に  $r = .918$  の相関が認められている (鶴田・山本・野嶋, 2014)。そうした意味では、Young (1998) の20項目よりも、さらに項目数が少なく、鶴田・山本・野嶋 (2014) の5因子構造と一致しているわけではないが、5因子構造によりそのインターネット依存態度や行動を詳細に測定可能な川上 (2022) の12項目からなる尺度は、有効に使用可能な尺度としての特性を備えていると言える。

しかしながら、発達段階に伴い、特に高校生と大学生においては、生活のパターンも異なり、インターネット使用についても、差異が認められる可能性がある。そこで本研究では、川上 (2022) で女子高校生を対象として実施された Young (1998) の20項目からなる尺度を、大学生を対象とした調査データに基づき、改めて吟

味することを目指す。さらに、依存傾向と関連すると考えられるセルフ・コントロール、高校生にとって本業と考えられる学習に対する意欲、さらには遅れに対する態度との関連について、高校生におけるデータと対照しながら検討することで、因子構造に対する妥当性を検討する。

## 方 法

### 調査時期

調査は2022年5月から9月にかけて、実施された。

### 調査対象者

近畿圏の私立A女子大学に所属する女子大学生82名(平均年齢18.6歳、 $SD = 1.3$ )、中部圏の私立B大学に所属する大学生62名(男性31名、女性31名;平均年齢20.8歳、 $SD = 5.1$ )、北陸圏の国立C大学に所属する大学生52名(男性27名、女性25名;平均年齢19.6歳、 $SD = 2.1$ )が調査に参加した。全調査対象者196名の平均年齢は19.6歳( $SD = 3.3$ )であった。

### 質問紙の構成

本研究で取り扱う質問紙は、①Young(1998)によって作成されたInternet Addiction Test(IAT)、②杉若(1995)の「日常的なセルフ・コントロール尺度」、③河村(1999a, 1999b)のスクールモラル尺度のうち「学習意欲尺度」、④安藤・川上(2006)の「遅れに対する態度尺度(VODKA2005)」の4つの尺度を含んでいた。

①Young(1998)によって作成されたInternet Addiction Test(IAT:20項目)は、「インターネット」に対する依存の程度を測定するための尺度である。川上(2022)と同様、「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」のように、文の途中で止められた質問項目に対して、「全くない(1)」、「ときどきある(3)」、「いつももある(5)」の5件法で、普段の生活についての評定を求めた。項目は川上(2022)と同様の、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

②杉若(1995)の「日常的なセルフ・コントロール尺度」(20項目)は、「問題解決方略や報酬の遅延に関する項目」が含まれる「改良型セルフ・コントロール」(8項目)、情動的なストレス反応を除去してその場を乗り切ろうとする「調整型セルフ・コントロール」(5項目)、他者依存の傾向や自発的な行動に対する消極性を示し、自己制御とは異なるレベルでの対処方略を含む「外的要因による行動のコントロール」(7項目)の3因子から

構成される。「ものごとに集中できないときには、集中する方法を見つけ出す」(改良型セルフ・コントロール)、「憂うつなときには、楽しいことを考えるようにしている」(調整型セルフ・コントロール)、「自分の悪い習慣をやめるには、外部からの手助けが必要である」(外的要因による行動のコントロール)などの項目に対して、「全くあてはまらない(1)」から「まさにあてはまる(6)」までの6件法で回答が求められた。項目は一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

③河村(1999a, 1999b)による「学習意欲尺度」(4項目)は、学校の勉強に意欲的に取り組んでいるかを測定する尺度であり、「学校の勉強には自分から自主的に取り組んでいる」などの4項目から構成される質問項目に、「全く当てはまらない(1)」、「どちらとも言えない(3)」、「とても当てはまる(5)」の5件法で、回答を求めるものであった。これら4項目は、以下に詳述する「遅れに対する態度尺度(VODKA2005)」と併せて、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

④安藤・川上(2006)の「遅れに対する態度尺度(VODKA2005)」(37項目)は、自分の遅れに対して悪いと思う態度である“自分の遅れに対する罪悪感”(21項目)、他者の遅れを非難する“他者の遅れに対する非難”(12項目)、遅れ一般に対してその自己責任性を重視する態度である“遅れの自己責任性”(4項目)に対応する37項目に対して「全く当てはまらない(1)」、「どちらとも言えない(3)」、「とても当てはまる(5)」の5件法で回答が求められた。これら37項目は、上記の「学習意欲尺度」と併せて、一通りのランダムな順番で配置され、評定が求められた。

### 手続き

大学教員が担当する心理学系講義(集中講義を含む)あるいは一般教養課程の講義時間中に質問紙が配付され、コースクレジットとして実施された。調査参加に同意する調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。調査対象者には個人ペースでこれらに回答することが求められた。

### 倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されないこと、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることをフェイスシートに記載し、周知した。これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

## 結 果

### インターネット依存尺度の因子分析

以降の分析は、尺度項目に対する回答に欠損のない、172名（男性50名、女性122名；平均年齢19.6歳、 $SD = 3.5$ ）のデータを対象とした。IAT20項目に対して、あらかじめ主因子法、Promax回転による因子分析を行った。因子の解釈可能性を判断し、5因子解が妥当と考え、項目や因子の解釈可能性や、どの因子にも因子負荷量が|.40|未満であることや、複数の因子に対して因子負荷量が|.40|以上であることを考慮して、項目の削除を行った上で因子分析を繰り返し、最終的に13項目からなる5因子解を採択した。この因子分析表を表1に示す。

第一因子は、「次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが」、「インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが」の2項目に負荷量が高く、インターネットを使用していない場面でインターネットに思いを馳せる傾向であり、“囚われ”と命名された。第二因子は、「インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが」、「インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが」、「インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが」、「インターネットをしている時間が長いと周りの人から文句を言われたことが」の4項目に負荷量が高く、インターネットをしていることで、本業である学業や仕事が後回しになってしまう傾向であり、“本業劣後”と命名された。第三因子は、「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」、「インターネットをしている最中に誰かに邪魔をされると、いらいらしたり、怒ったり、大声を出したりすることが」、「インターネットの無い生活は、退屈でむなしく、つまらないものだろうと恐ろしく思うことが」の3項目に負荷量が高く、インターネットをすることで、生活が豊かになっているとする傾向であり、“依りどころ”と命名された。第四因子は、「インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが」、「インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが」の2項目に負荷量が高く、インターネットを過剰に使用していることを意識する傾向であり、“過剰使用”と命名された。第五因子は、「誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが」、「配偶者

や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが」の2項目に負荷量が高く、インターネットを、対面での対人関係よりも優先する傾向であり、“ネット優先”と命名された。

信頼性検討のために、各因子が高い負荷を示した項目の得点についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、表1に示したように、.681～.788の値が得られた。各因子に負荷量の高い項目の平均値を個人ごとに算出し、これを個人の下位尺度得点とした。そのうえで、“囚われ”、“本業劣後”、“依りどころ”、“過剰使用”、“ネット優先”の下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出し、これらについても表1に示した。

次に、インターネット依存尺度の下位尺度得点間相関を算出し、この結果を表2に示した。なお本研究では、相関係数の効果量についてはCohen（1992）に倣い、 $|r| = .10$ を効果量小、 $|r| = .30$ を効果量中、 $|r| = .50$ を効果量大と判断した。“過剰使用”と“ネット優先”の間には、効果量小の有意な正の相関（ $r = .278, p < .01$ ）が認められた。それ以外の全ての組み合わせについては、効果量中から大の有意な正の相関（ $r = .377 \sim .536$ , いずれも  $p < .01$ ）が認められた。すなわち、“過剰使用”と“ネット優先”の間については、関連性がやや低いものの、その他の下位尺度間では、相互に関連があることが示唆された。

### 関連尺度の尺度構成

続いて、個人特性を測定する日常的なセルフ・コントロール尺度、学習意欲尺度、遅れに対する態度尺度（VODKA2005）について、すべて先行研究に倣って（下位）尺度の構成を行った。これらの個人特性を測定する下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出し、これを表3に示した。

次に、IATの下位尺度得点と個人特性の下位尺度得点との相関係数を算出した（表4）。日常的なセルフ・コントロール尺度については、“改良型セルフ・コントロール”と“本業劣後”の間に効果量小の負の相関、“外的要因による行動のコントロール”と、“囚われ”、“本業劣後”、“依りどころ”、“過剰使用”との間に効果量中の、“ネット優先”との間に効果量小の正の相関が認められた。また、“調整型セルフ・コントロール”については、“ネット優先”との間にのみ効果量小の有意な負の相関が認められた。

学習意欲については、“本業劣後”との間に効果量小の負の相関が認められた。すなわち、学習意欲が低いことと本業について後回しにする傾向が強いことの間に関連が認められた。IATのその他の下位尺度得点との

表1 インターネット依存尺度の因子分析表

項目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
囚われ ( $\alpha = .681, M = 2.23, SD = 0.95$ )						
次にインターネットをするときのことを考えている自分に気がつくことが	<b>.805</b>	.098	-.106	-.009	-.042	.593
インターネットをしていないときでもインターネットのことばかり考えていたり、インターネットをしているところを空想したりすることが	<b>.622</b>	-.012	.198	-.072	-.013	.510
本業劣後 ( $\alpha = .788, M = 2.75, SD = 0.94$ )						
インターネットをしている時間が長くて、学校の成績や学業に支障をきたすことが	-.022	<b>.880</b>	.013	.002	-.020	.753
インターネットのために、仕事の能率や成果が下がったことが	.063	<b>.668</b>	-.068	.117	-.068	.525
インターネットをする時間を増やすために、家庭での仕事や役割をおろそかにすることが	.016	<b>.617</b>	.101	-.043	.044	.450
インターネットをしている時間が長いと周りの人から文句を言われたことが	.060	<b>.407</b>	.045	.021	.209	.360
依りどころ ( $\alpha = .698, M = 2.26, SD = 0.87$ )						
インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが	-.034	-.062	<b>.881</b>	.054	-.006	.740
インターネットをしている最中に誰かに邪魔をされると、いらいらしたり、怒ったり、大声を出したりすることが	-.038	.121	<b>.617</b>	-.125	.017	.358
インターネットの無い生活は、退屈でむなしく、つまらないものだろうと恐ろしく思うことが	.090	.004	<b>.466</b>	.174	-.051	.384
過剰使用 ( $\alpha = .710, M = 3.13, SD = 1.14$ )						
インターネットをする時間を減らそうとしても、できないことが	-.101	.041	-.015	<b>1.033</b>	.005	1.001
インターネットをしているとき「あと数分だけ」と言っている自分に気がつくことが	.149	.074	.029	<b>.430</b>	-.019	.342
ネット優先 ( $\alpha = .725, M = 2.33, SD = 1.02$ )						
配偶者や友人と過ごすよりも、インターネットを選ぶことが	-.117	.060	-.022	-.049	<b>.957</b>	.810
誰かと外出するより、インターネットを選ぶことが	.314	-.134	.031	.118	<b>.515</b>	.557
	<b>F1</b>	<b>F2</b>	<b>F3</b>	<b>F4</b>	<b>F5</b>	
<b>F1</b>	—	.539	.653	.535	.544	
<b>F2</b>		—	.427	.577	.368	
<b>F3</b>			—	.521	.478	
<b>F4</b>				—	.260	

表2 インターネット依存尺度の下位尺度間相関

	囚われ	本業劣後	依りどころ	過剰使用	ネット優先
囚われ	—				
本業劣後	.477 **	—			
依りどころ	.499 **	.412 **	—		
過剰使用	.421 **	.536 **	.451 **	—	
ネット優先	.468 **	.377 **	.402 **	.278 **	—

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

表3 本研究で使用された個人特性下位尺度得点の平均値、標準偏差

		平均値	標準偏差
日常的な セルフ・コントロール	改良型セルフ・コントロール	3.53	0.83
	外的要因による行動のコントロール	3.88	0.92
	調整型セルフ・コントロール	3.75	0.98
スクールモラル	学習意欲（河村，1999）	3.35	0.78
	自分の遅れに対する罪悪感	3.50	0.71
VODKA2005	他者の遅れに対する非難	2.44	0.85
	遅れの自己責任性	3.67	0.96

表4 IATの下位尺度得点と個人特性の下位尺度得点との相関係数

	囚われ	本業劣後	依りどころ	過剰使用	ネット優先
改良型セルフ・コントロール	-.081	-.236 **	.027	-.040	-.179 *
外的要因による行動のコントロール	.266 **	.348 **	.262 **	.282 **	.192 *
調整型セルフ・コントロール	-.081	-.054	.039	.045	-.212 **
学習意欲（河村，1999）	-.108	-.219 **	-.013	-.047	-.143 †
自分の遅れに対する罪悪感	.092	.073	.111	.162 *	-.039
他者の遅れに対する非難	.129 †	.016	.204 **	.011	.102
遅れの自己責任性	-.038	.043	.022	.008	.042

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ 

間には有意な相関は認められなかった。VODKA2005については、“他者の遅れに対する非難”と“依りどころ”との間に効果量小の有意な正の相関が認められた。

## 考 察

本研究では、IATに対して、独自に因子分析を実施し、囚われ、本業劣後、依りどころ、過剰使用、ネット優先の5つの下位尺度得点を算出した。川上（2022）が報告した、高校生を対象としたデータの因子分析に基づく下位尺度とは若干異なっていることがわかる。すなわち、囚われ、ネット優先については、同一の項目から同一の因子として抽出されているが、過剰使用については、高校生データで抽出された因子から「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」の項目が外れていることがわかる。また、高校生データで抽出された本業怠慢の因子は、「インターネットをしている時間が長いと周りの人から文句を言われたことが」の項目が加わり、本業を後回しにすることで、他者との関係の中で社会的な関係に問題が起きていることを含み込んだ因子となっている。さらに高校生データでは、気晴らしとして抽出された「インターネットをし

ていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」と「日々の生活の心配事から心をそらすためにインターネットで心を静めることが」の2項目は、まとまった因子としては抽出されず、「インターネットをしていないと憂うつになったり、いらいらしたりしても、再開すると嫌な気持ちが消えてしまうことが」のみが、「インターネットをしている最中に誰かに邪魔をされると、いらいらしたり、怒ったり、大声を出したりすることが」、「インターネットの無い生活は、退屈でむなしく、つまらないものだろうと恐ろしく思うことが」と共に因子として抽出され、これは、インターネットに対して、「退屈でむなしく」「いらいらしたり」「憂鬱にな」ったりしがちな、日常生活から逃避するための依りどころとなっていることを示す因子であると解釈された。

これらのうち、過剰使用は、インターネットの使用の仕方に関するものであり、どの程度依存的な行動をとっているのかに関する尺度となる（川上，2022）が、今回の大学生データにおける過剰使用は、「気がつくと思っていたより、長い時間インターネットをしていることが」の項目が外れていることから、高校生では自覚的ではないものであった、依存的な行動が、「過剰に使用し

ている」という意識を伴いながらの依存的な行動である可能性を示唆する。また囚われと本業劣後、ネット優先は、インターネットに依存的になることで、どのような影響が出ているのかに関する尺度であり、日常的にインターネットのことを考えたり、本研究の調査対象者である大学生にとっての本業である勉強に遅れが出たり、対人場面よりもインターネットを優先してしまう、そして場合によっては対人的な問題が生起してしまっているのかの尺度となる。そして依りどころは、インターネット使用ができない日常を、退屈でむなしく、憂鬱で、いらいらするようなものであるとする認知に関わる尺度となる。そうした点では、この依りどころは、高校生データにおいて抽出された「気晴らし」因子と共通性を持つものであると言える。

これらの尺度得点と、個人特性との関連について相関分析を行った結果、本業劣後は改良型セルフ・コントロールと関連していることが示された。改良型セルフ・コントロールが「習慣的な行動を新しくしてより望ましい行動へと変容していくためのセルフ・コントロール」(杉若, 1995)であり、自発的なセルフ・コントロールであることを踏まえると、大学生のインターネット使用に際して、本業を後回しにしないように適切に使用するには、自発的なセルフ・コントロールが必要であることが示唆される。これは、高校生データにおいても認められた傾向である。

一方で、囚われ、本業劣後、依りどころ、過剰使用は、外的要因による行動のコントロールと関連が示された。外的要因による行動のコントロールが「他者依存の傾向や自発的な行動に対する消極性」(杉若, 1995)であることを踏まえると、大学生において、インターネットに対する依存的な認知、行動は、自発的な行動に対する消極性ゆえのものであることが示唆される。

また、本業劣後と学習意欲との間に関連が認められたことは、学習意欲が低ければ、大学生にとっての本業である勉強等を後回しにしがちであることを示し、概ね妥当な結果であると言える。加えて、高校生データにおいても、本業怠慢が学習意欲の低さと関係していた(川上, 2022)こととも整合的である。ただ、一方で、高校生データにおいては、この学習意欲の低さは、過剰使用とも関連を示したが、本研究における大学生データにおいては、そうした関連性は示されなかった。これは、大学生においては、時間のマネジメントがより柔軟にできることで、学習意欲が低いことが、直接的に多くの時間をインターネットに割いているわけではない可能性を示唆している。高校生においては、時間のマネジメントの

幅が狭く、学習意欲が低いことは、直接的に、過剰なインターネット使用を招く可能性が高いが、大学生においては、学習意欲の低さは、必ずしもインターネットの過剰な使用につながるわけではなく、より幅の広い時間のマネジメントがなされる結果、より明確になった趣味やアルバイトなど、インターネット使用以外の時間に振り向けられる可能性が考えられる。こうした点については、時間のマネジメント全体を捉えるような適切な尺度等を用いて、より具体的に検討することが必要となると考えられる。

VODKA2005に関しては、他者の遅れに対する非難と依りどころとの間に関連が認められ、他者の遅れに対して批判的な態度を取る大学生ほど、インターネットに対して依存的な認知をもっていることを示唆する。これは、依りどころが、インターネットをしている状況を満たされた状況であると考え、それを阻まれることを不快な経験であると捉える傾向でもあることから、他者の遅れのような、他者に起因することで自分が迷惑を被る、たとえばインターネットを使用する時間を削られる、といったことに対して、イライラするなどの不快さを感じていることを示唆しているのかもしれない。インターネットの使用における依存的傾向が、自らの遅れを容認するようなセルフ・コントロールの低さと関連している可能性を検討するために、今回は遅れに対する態度尺度を調査に含めたが、ここで認められたのは、むしろ他者からどのような扱いを受けるか、それが自らの満たされた状況であるインターネット使用状況を邪魔されるような扱いであるのか、といったことに対する「態度」との一貫性であったのではないかと考えられる。

以上のように、本研究においては、Young (1998)の尺度が改めて大学生データに基づいて因子分析され、どの程度依存的な行動をとっているのか、依存的になることで、どのような影響が出ているのか、またインターネット使用に対してどのように認知しているのかに関わる5つの因子が抽出された。これらと個人特性との関連は概ね妥当なものであった。しかしながら、本研究の結果は、女子高校生49名のデータに基づいて因子分析を行った川上(2022)の結果とは若干の不一致を含むものであり、これが、データのもつ何らかの誤差によるものであるのか、高校生と大学生とのインターネットに対する意識の差異を直接的に反映しているものであるのか、まだ結論を下すに十分なデータが収集されているとは言いがたい。今後、高校生、大学生双方について、データ数を増やしていきながら、インターネット依存傾向について、より詳細に検討していくことが必要である。



## 引用文献

- 安藤史高・川上正浩 (2006). 期限付き課題の遂行について (12) —VODKA2005 作成の試み (1) 東海心理学会第 55 回大会発表論文集, 49.
- Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, 112, 155-159.
- Griffiths, M. (2005). A 'components' model of addiction within a biopsychosocial framework. *Journal of Substance Use*, 10, 191-197.
- 池村努 (2014). 若者の SNS 利用傾向と問題点に対する対策の提案 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 7, 281-288.
- Jelenchick, L.A., Becker, T., & Moreno, M.A. (2012). Assessing the psychometric properties of the Internet Addiction Test (IAT) in US college students. *Psychiatry Research*, 196, 296-301.
- 川原正人 (2021). ネット依存尺度の因子構造に関する検討 東京未来大学研究紀要, 15, 25-34.
- 川上正浩 (2022). インターネット依存尺度 (IAT) の検討—女子高校生を対象として— 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, 16, 41-51.
- 河村茂雄 (1999a). 楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U (中学校用) 実施・解釈ハンドブック 図書文化
- 河村茂雄 (1999b). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用 (高校生用) 岩手大学教育学部研究年報, 59, 101-108.
- モバイル社会研究所株式会社 NTT ドコモモバイル社会研究所 (2019). ケータイ社会白書 2019 年版 Retrieved from [https://www.mobaken.jp/whitepaper/wp19/pdf/wp19\\_all.pdf](https://www.mobaken.jp/whitepaper/wp19/pdf/wp19_all.pdf) (2021 年 1 月 10 日)
- 内閣府 (2021). 令和 2 年度青少年のインターネット利用環境実態調査 Retrieved from <https://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/r02/net-jittai/pdf-index.html> (2022 年 2 月 11 日)
- 中山 秀紀 (2015). 若者のインターネット依存 (<特集>現代の若者のメンタルヘルス) 心身医学, 55, 1343-1352.
- 岡安孝弘 (2016). インターネット依存の心理社会的影響およびリスク要因に関する研究の動向 明治大学心理社会学研究, 11, 23-45.
- Osada, H. (2013). Internet addiction in Japanese college students: Is Japanese version of Internet Addiction Test (JIAT) useful as a screening tool. 専修人間科学論集心理学篇, 3, 71-80.
- Samaha, A.A., Fawaz, M., Yahfoufi, N.E., Gebbawi, M., Abdallah, H., Baydoun, S.A., Ghaddar, A., & Eid, A.H. (2018). Assessing the Psychometric Properties of the Internet Addiction Test (IAT) Among Lebanese College Students. *Frontiers in Public Health*, 17, 1-7.
- 総務省 (2013). 青少年のインターネット利用と依存傾向に関する調査 調査結果報告書 Retrieved from <https://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2013/internet-addiction.pdf> (2021 年 1 月 10 日)
- 杉若弘子 (1995). 日常的なセルフ・コントロールの個人差評価に関する研究 心理学研究, 66, 169-175.
- 鶴田利郎・山本裕子・野嶋栄一郎 (2014). 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度の開発 日本教育工学会論文誌, 37, 491-504.
- Widyanto, L., & McMurrin, M. (2004). The psychometric properties of the internet addiction test. *Cyberpsychology & Behavior*, 7, 443-450.
- Widyanto, L., Griffiths, M.D., & Brunnsden, V. (2011). A psychometric comparison of the Internet Addiction Test, the Internet-Related Problem Scale, and self-diagnosis. *Cyberpsychology, Behavior, and Social Networking*, 14, 141-149.
- Young, K.S. (1998). *Caught in the Net: How to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recovery*. New York: John Wiley

# **Examination of the Young's Internet Addiction Test (IAT) : Using University Students' Data**

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology  
Masahiro KAWAKAMI

University of Toyama  
Mariko INOUE

## **Abstract**

Kawakami (2022) examined Young's (1998) Internet Addiction Test (IAT) with 49 Japanese female high school students and conducted factor analysis. As a result, five factors were extracted: "Captured", "Excessive Use", "Negligence of Main Duty", "Feeling Better with Internet Use", and "Internet Priority". In this study, Young's (1998) Internet Addiction Test (IAT) was administered to 168 university students, and factor analysis was conducted again on the university students' data. As a result, five factors were extracted: "Captured", "Postponing Main Duty", "Internet as Haven", "Excessive Use", and "Internet Priority". Although the results were slightly different from factor analysis based on high school students' data (Kawakami, 2022), examining the correlation between individual characteristics measured and scores on these five subscales, the results shows that Postponing Main Duty correlates with Reformatory Self-Control and Learning Motivation, Captured, Postponing Main Duty, Internet as Haven, and Excessive Use correlates with External Control, and Internet as Haven correlates with Blaming on Others' Delay.

Keywords: Internet Addiction, University Students, Internet Addiction Test

